

平成22年度 すぎなみ大人塾 昼・夜合同成果発表会

平成23年3月5日(土) 1時30分～4時30分 場所：セッション杉並

オープニング

杉並区教育委員会社会教育スポーツ課長 植田敏郎より

みなさま、一年間、本当にお疲れさまでした。私は、本日の成果発表会を楽しみにしておりました。というのも、現在、社会教育の分野では、地域のみなさん一人ひとりが自ら課題を見つけ、解決する学びの場をどのように模索するかが大きな課題となっております。また、区議会でも、ある委員から、社会教育がさまざまな年齢層、得に若い世代をまきこむにはどのような働きかけが必要かという宿題をいただいております。今日、この場で、みなさまのさまざまな視点、ご意見をうかがわさせていただけたらと思っております。

卒業後のこれから、みなさまが各地域で積極的に活動をされていくことを非常に期待しております。みなさまの持つ様々な力を、様々な場面で大いに発揮していただき、それを仲間づくり、地域づくりに発展させ、本当に生活しやすい、また、生きがいを感じられる町になったらと思っております。みなさまの熱い思いをいただきながら、私自身も学ばさせていただきたいと、そんな風に思っております。本日は、どうぞよろしくお願い申し上げます。

第1部 各コースの成果発表

昼コース「だがしや楽校を開こう ～持ち味のおすそ分けと語り合いが未来を拓く！」

発表進行：西崎 泰司

今日は、私たちが受講した昼コースのテーマである「だがしや楽校」とは何だったのか、その成果も含めて述べさせていただきたいと思っております。私自身、大変興味深いタイトルに惹かれ、受講しました。さまざまな意味・イメージを喚起させるこの言葉、それって一体なんなんだろうと、私自身もまだ理解できているわけではありません。しかし、それぞれがこの1年間の中で、学び、考え、それぞれの理解があると思います。それぞれのだがしや楽校が形づくられたといってもよいかもしれません。コース当初には30名の参加があり、最後には20名ほどになりましたが、このメンバー同士で四苦八苦しながら一緒に学んできました。それを代表して3名の方に今考える成果を、それぞれの視点から発表していただきます。またその3名の方それぞれに、サブスピーカーを一人ずつ置き、発表をしていきます。それではよろしくお願い申し上げます。

1年間の活動報告 発表者：黒川 百合子

昼コースでは、学習支援者の松田先生が山形で始められた「だがしや楽校」の手法を学び、だれでも、どこでも気軽に自分の持ち味を見せ合い、お隣さんどうしや地域でゆるやかなつながりをひろげていこうと、講座がスタートしました。

自分の知恵や特技を見せ合う...これは、受講生にとっても高いハードルでもありました。見せ

るものがない！果たして、外の人に見せて反応が得られるものなのか？評価してもらえるの？自己満足では...講座の時間で議論されました。

そこで7月、いつも講座会場であるあんさんぶる荻窪の5階から1階の玄関前に学びの場を変えて、そこにテーブルを出し「自分みせ(店・見せ)」を実験してみました。暑い夏の日午前、人通りは多くはありませんでしたが、「何をしていますか？」「きょうも暑いですね」と、「もの・コト」を媒介にして、会話が生まれることを体感しました。

昭和の駄菓子屋をイメージしたとき、店のおばちゃんや近所の子どもたちがやりとりとしながら、知恵をもらったりとそこで友達の輪を広げたり、駄菓子屋は地域のたまり場として息づいていました。それが、「孤独死」や「無縁社会」という言葉が時代を象徴する言葉になってしまう昨今、人とのやりとりが私たち自身も苦手になってしまっているのかもしれない。講座のテーマにある「だがしや楽校を開こう！」を実行しようにも、隣の席にいる人がどんな人なのか？はもとより、世代間の交流もうまく進んではいませんでした。

このため、次にアクションを起こしたのは、「秋の焼き芋パーティ」でした。仲間づくりでお互いを知ろう、自分たちがまず楽しもう、目的はこの2つでした。このときも、秋の和田堀公園で「自分みせ」をトライアルと位置づけ展開しました。

しかし、だがしや楽校と地域で開く祭りの違いは何なのか？自分がこのだがしや楽校でやりたいことは果たしてイベントなのか？個々の目的意識や課題はまだ棚上げしたままでした。ですが、この日、同じテーマで成人学習講座を開催している横浜市の都筑区の「つづき楽校」の皆さんが飛び入り参加し交流の場を持つことができました。区民の平均年齢39歳代の全国1若い世代が暮らす地域においても地域コミュニティを学ぶ必要性や共通する課題においても意見を交わす機会となりました。

そして翌月には、私たちが、都筑区で初めて開催される「だがしや楽校」に出かけていきました。この時期、昼コースの最大の山場でもあった私たちのだがしや楽校をいつ、どのようなスタイルで開催するかを見据え、コンセプト、集客、広報、全体像を猫く大きなてがかりを持ち帰りました。

このように、昼コースでは、だがしや的あり方をツールに地域でのつながりを模索している他地域との交流がもうひとつの学びの機会となりました。松田先生が提唱する会社社会にはないゆるやかなつながりの具体例として、「おすそわけ」、「おたがいさま」の関係、そこから生まれる「おもてなし」などを受講生が実践する機会もありました。

また12月、福島の子津坂下の社会教育関係者の方が杉並を視察に訪れた際、ただ会食をするのではなく、あらかじめ、福島特産の新鮮な野菜やお酒、食材を送ってもらい、私たちの手で料理をし、おもてなし交流会を開催しました。区内のキッチンスタジオで受講生同士も料理をすることで、またひと味違う会話が広がりました。このつながりから、1月に私たちがだがしや楽校を開いたときには、福島からサプライズで「さらさらの雪」が届きました。

そして...1月30日、今年度の受講生の企画によるすぎなみだがしや楽校はこの大人塾OBの方が運営している「かふえ&ほーるWITH遊」で開催することになりました。実際に会場下見を兼ねてその場で講座を開き、レイアウトを考え、ここでやりたいことと、できることのすり合わせを行い、ロケーションのりサーチなどを行いました。

「だがしや楽校福まつり」と題し西崎さんを実行委員長に、1年間学んだ「自分店せのあり方、

考え方をそれぞれが表現し集大成としました。

その内容と成果については、次に各発表者から報告があると思いますが、福まつりに至る受講生間の議論こそ、大人塾の醍醐味であり大人が学ぶ意味かもしれません。受講にあたり、個々が設定した到達点はいったいなんだったのかを思い返したとき、当初なかった到達点が実はなににかしら設定されていた自分に気づくかもしれません。

福まつりで一定の充足感を得たものの、到達点をどこにおいて臨んだかによ9、満足度には大差があると思います。「だがしや楽校」をツールにこの杉並で生きる楽しみをどう見つけるか、その姿もひとつの「自分みせ」なのかもしれません。それではここから、3名の方から各自の実感についてお話していただきます。

「楽しいところに人が集まる」 発表者：佐藤 志津子

佐藤です。よろしくお願いいたします。私は昨年、生活が大きく変わったことをきっかけに、これからの人生を楽しいものにしたいと思って参加しました。学習支援者である松田先生は、だれの意見も否定しない方で、その雰囲気によってか講座全体が居心地のよい時間となりました。

卒業イベントである「だがしや楽校・福まつり」では、私は広報と健康ウォークを担当しました。まず広報については、12

月ぎりぎりにチラシができあがり、2町会300枚を回覧板にのせて送付したり、荻窪体育館のイベントでも配布しました。おかげさまで、たくさんの方がいらしていただきました。

健康ウォークとは、地域の中を歩いてまわるツアーです。16名の方がご参加され、早く会場にいらした方には健康ウォークに関する本をテキストがわりにプレゼントしました。松田先生のおっしゃる「おすそわけ」です。ウォークは、8000歩弱でしたが、大変寒い日でした。山形からいらした方も6名参加され、どうやら山形のほうではあまり歩かないそうで、ゴミを捨てるのも車を使ってしまう、なんてお話をうかがいました。

角川庭園では、園長から施設の説明をうかがい、資料をもらって記念撮影をしました。この健康ウォークをふりかえると、一番成功した理由は、事前に一緒に実施した仲間と実際に歩いてまわったこと、手作りの旗を仲間に使っていただいたこと、お餅の寄付やフリードリンクなど、歩いた方はとても満足されていました。このように仲間とともに一緒にできたことがとても楽しかったです。

この1年間を通して考えたことは2つあります。これまで私は体操、ダンスしか興味がなかったのですが、他受講生の方の影響から文化的なものづくりにふれる機会を得ることができました。2つ目はどんなイベントをしてもワンコイン以下で、なんとも安上がりな講座でした。

さて、卒業後のこれから何ができるかということについては、「ゆるやかなつながり」ということをテーマにしてまとめてみました。これから、「ウォーキング」と「ランチ」を兼ねた会を月1回ほど立ち上げたいと思っています。四季折々自然の豊かさの中で歩き、新しい町を発見する時間です。またランチタイムはおしゃべりタイムで、ITやものづくりの教え合い、支え合い、情報交換ができる場。5月になったらチラシをつくってスタートしたいと思っています。これから、新しい何かができるだろうと、私は楽しみにしています。ありがとうございました。



サブスピーカー：宮崎 圭子

佐藤さんは本当に体育会系でしたが、講座の中で、折り紙でつくれる箸袋を、同じ受講メンバーである黒川さんがみんなに教えてくれました。はじめ佐藤さんはこんなことできないと言っていたのですが、だんだんと佐藤さんがすごくかわいいクラフトや手芸を作りはじめました。彼女にとってはまさに文化革命といえるほどだったかもしれません。私は去年も受講しましたが、「だがしや楽校」がまだまだ分からなくて今年も参加しました。その中でいろんな方の「自分みせ」を見ながら自分のアイデアを広げていきました。最近発明した最新作は、ペットボトルのキャップにフェルトをまいたアクセサリーやキーホルダーです。なんでもないもの、ゴミになってしまうものでもかわいいものができる。これからはそうしたことを子どもたちに伝えていけたらと思っています。また先ほどの佐藤さんと一緒に何かしたいと思っています。みなさまもぜひ一緒にやりませんか？どうぞよろしく願いいたします。ありがとうございました。

「暖かい絆 となり三軒両隣」 発表者：小澤 恵一

だがしや楽校の小澤です。よろしく願いいたします。お手元の資料をご覧になられながら、耳を傾けていただければと思います。私はこれまでずっと、人口構造の変化についてとても興味を持ってきました。構造が大きく変わり始めている、これからの生活を、暮らしを本当にどうすればよいのか、ということを考えたい。最終的には、かつてのような「向こう三軒両隣」の助け合い・支えあいの仕組みができたらと思っています。

少子高齢化が進み、少数世帯も増えている中で、高齢世帯をどうやって支えるのか、もしくは子育てや介護などはどうなっていくのか。私自身はどんな暮らしとなるのか。平成18年をピークに人口は減少の一途をたどり、それに伴って生産・消費、さらには社会の規模自体が縮小傾向になっていきます。このような状況の中で、一体どう暮らしていけるのか、またなぜ少子化になっていくのか、これから考えなければなりません。経済の鈍化、現役世代への負担増、年金や保険のシステムの変化、自治体の問題や介護、一人暮らしなどの問題が非常に明らかになってきています。また、年少人口は今、13パーセント、逆に高齢人口が増え、生産年齢にある方が、2030年には1.5人で一人を支えなければいけません。そのような姿を、腕組をしている絵で表現しました。

このような状況の中で、どうやったら支え合えるのか、当面の課題としては子育て・介護、長い目で見たときには今後も社会が発展していけるのかどうかというか、自分自身が直面するだろうことには、年金、健康保険等出費が増えていきます。

そのような中、昔、歌にあったような「向こう三軒両隣」の社会ができたらと思います。講座の中で、そうした鳥瞰的な視点ももって、どういう部分に課題があるのかを勉強したかったが、それは今後、みなさんと話し合う機会をつくっていけたらと思っています。究極的には、支えあいのネットワーク、コミュニティづくりにつながります。

サブスピーカー：山田 正紘

みなさんと一緒に1年間受講してきましたが、この「だがしや楽校」が本当に何だったのか。

私なりに3つのキーワードで考えました。それは、「学ぶ」「絆」「楽しむ」という3つです。「学ぶ」という点では、開講記念の際に林光氏が問題提起をされた人口減少社会の問題について、課題をあたえられたと思っています。また、「絆」は、地域コミュニケーションができる場を広めるために、何ができるか1年間を通して考えさせられました。自分なりの回答はまだ出ていませんが。最後の「楽しむ」というのは、私たちが実施した福まつりのイベントで、楽しんだということ。中でも大きなことは、先ほどの小澤さんが、人口減少の課題を区民に発信でき、とても好評であったということ。そういう風を感じています。ありがとうございました。

手作り絵本「生き方楽校」の朗読 作者：福島美世

この絵本を書いたきっかけについてお話しします。なぜ書きたいと思ったかということ、自分の子どもが小学校高学年になったとき、いろんなことを吸収できる時間なのに、テレビゲームが流行っていて、友達関係もゲームでつながっているような状況でした。親として、子どもに買ってあげるかどうか悩んでいました。そんなときに、「生き方」を学べる学校、普通の学校でも塾でもない、いろんなことを経験できる学校があればと心に思っていました。それから数年が立ちましたが、自分の子どもの育ちを見ていて感じたことを絵本にしてみました。

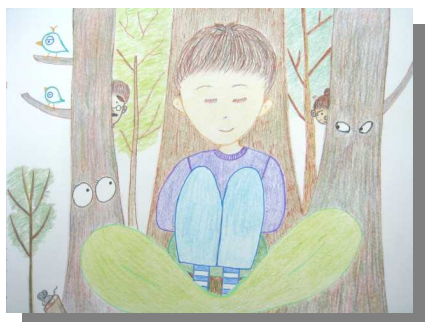
これを読んだ子どもたちに、人はいろんな人と出会い、いろんなことを経験しながら、成長していくものだ、ということ伝えたいと思って描きました。子どもが対象ですが、もちろん大人の方も、これからの生き方のヒントになれば幸いです。これから読み聞かせを区内でされている御木さんに朗読していただきます。

【生き方楽校】 朗読者：御木さよこ



ある小さな村に 生き方学校がありまし 自分の生き方について力を入れている学校です
あたたかく見守り みとめてくれる おひげの校長先生 いつも口うるさいけど 心配してくれるやさしい 教頭先生がいます

校長先生と教頭先生が いつも子ども達をあたたかく見守っています 子ども達は違う考えを持っていることをみとめ合っています
そんな仲間がいるから 安心して 発言したり イキイキ活動できるのです



生き方の時間に どんな生き方をしたいか 子ども達は紙に書きます それを学校にはりだしています
子ども達は 一人の静かな時間も大切にしています ワクワクできるための 生き方についてそっと考えているのです

学校は 生き方についての美術館になります それを見てそれぞれの考え方に 子ども同士話しをする時間が 増えていきます

「今日考えたこと 明日校長先生に聞いてもらったら 何て言うかない」

「失敗してもいいから たくさん経験してごらん」

いつも同じことしか言わないけど、なんか力と勇気がわいてくる」

その体験にたくさんの息を吹きかけることで 生きる喜びがふくらんでいくのです

運動して 体をたくさん動かすことで気分がさわやかになり いい考えが浮かびます

草花を育てると あたたかい 気持ちになり 野菜を育てると 食べられることに感謝が生まれます

「いろんな体験をして 思い出を作って 自分の生き方が決まっていくのかな？」

「夢・夢っていそがなくてもいろんな経験から自然に決まっていくのかな？」

そのために生き方学校があるのです。



夜コース

「はじめてのソーシャルアクション 自分らしい社会貢献の実践力を身に付ける」

A : 「12月4日『すぎなみ発見ワークショップ広場』各ワークショップの実践報告」

「おいしい野菜の選び方と簡単料理」

食と農チーム 発表者 尾形紗世

実施の目的：

新鮮な野菜の良さを理解してもらい、野菜を買う際の知識を高めてもらう。(旬を知ったり、買う場所を選べる様になる。)素材を活かした簡単料理を披露。同時に、地産地消、保存食、エコなども考えてもらうこと。また、季節感のない東京の杉並において普段料理をしない人たちや、定年後の男性の方たちに手間をかけない簡単料理を知ってもらうこと。



工夫した点

当日のプログラムに、おいしい野菜の選び方のクイズを実施。会場に野菜をならべて、正解率の高い方から、商品として持って帰る楽しさを演出したこと。

当日の様子

写真にうつっている方がワークショップの講師となった吉田さん。料理を紹介しながら参加者

に話かけていただいたり、料理を試食してもらいながら実施しました。そのような進行により、緊張感がとれて、場がなごみました。やはり、飲食をともにすることが雰囲気になごませてくれました。スタッフ側が気を使うことなくすぐにたのしく食べられる雰囲気ができていました。空気ができました。また、スタッフもビデオを使ったり、音楽を流したりと、いろんな仕掛けを試みました。来てくださった方に飽きさせない時間が提供できたように思います。

また、参加者との情報交換の時間を設けましたが、野菜に関する質問がたくさん出て、情報交換の場ができあがっていました。参加者の感想には、「今日の簡単料理は、実用的で現実的である」、「有機野菜を作っている立場に立って考えていくことも重要であると思った」上井草区民農園で野菜を作っている。週末しか行けないので、他の方との交流がない。今日のような情報もなく、寂しくおもっていた」などがあった。

ワークショップを実施して気付いたこと

興味のある事について、「実際に交流する場所」、及び、「情報交換のITスペース」の場が大切だということ。また、ふれあい農業マップのようなものが出されているが、グーグルマップなどでもっとリアルタイムに発信できたらと思いました。

「地域のキズナ～これっておせっかい?～ 社会教育チーム 発表者 太田武志

実施するにあたって

当日の運営を考えていくにあたって、参加されたみなさんは、せっかくおいでになったのですから、ただ座っているのではなく思いきり話していただく場を設定することから始めました。ちょうど私たちは5、6人のチームでしたが、メンバーの中に映画の主演を演じたメンバーがおり、小さいころの親からの虐待の経験を持っている方の映画を使うことにしました。

杉並の地域で実施するというのでやらなければいけないということだったが、杉並に目を向けたメンバーの問題意識というのはあまりありませんでした。ですが、みなで話し合っていくうちに、不登校や子育て、虐待など、いろいろ課題があることに気づいていきました。浮上してきた。その討論の中で、不登校と幼児虐待というのを特にテーマとしました。

実施する上で一番工夫した点は、調査をしていたときに、虐待月間というのがあることを知り、また、その月間を象徴するオレンジリボンという存在を知りました。メンバーの中で、当日出られなかった方がそのリボンを提供してくださり、それをスタッフでつけて実施しました。実施してみて、みなで問題意識を共有して話し合う、しゃべり場という場が大切であることを感じました。

実施してみたの感想

私がこの中で思ったのは、たくさんありましたが、一番必要なのは、勇気とか人間性の強さというものです。子どもにとっては、虐待はなかなか気付かないもので、そういう意味でも大人が大人の関わり方如何で、子どもへの影響はまったく変わってしまうということ。私はかなり民主主義的な人間ですけれども、今回はわりあいシビアなテーマだったので、苦しみがいろいろありまして、勉強になりました。

「初心者だから楽しめるすぎなみ街めぐり」 散歩・街歩きチーム 発表者 伏屋・清水

実施した目的

このワークショップをやると思ったのは、地域を身近に感じてほしい、もっといろんなことをみつけてほしい、そういう場を提供したいと考えたことです。街歩きをする前に、今日はこういったコースでいくかを学ぶ導入のワークショップを実施。また街歩きは、A B 2つのチームで行いましたが、実施後には両チームがお互いに発見したことなどを発表しあう、ふりかえりのためのワークショップを行ないました。いろんな発見をしたことをきちんと振り返る機会になりました。



実施してみて思ったこと

街歩きを目的にこられた方には、導入などのワークショップが重かったのかもしれない。また、広報するときはどういった目的でそれを行うのかきちんと発信できたらよかったです。また、気軽に参加できるような雰囲気ワークショップ等を通して伝えていくことが大切だと感じた。今後については、私自身まだ考え中ですが、これらの気づきをもとに、次に進めたらいいなと思っています。

空き家・空室に関心のある人集まれ！ 空き家・空室チーム 発表者 古川 洋一

実施した目的

空き家・空室の有効活用のアイデアを出し合って、区に提案することが目的。また、実施するにあたってのスタッフ側の問題意識としては、防犯上、景観上から、また、団体・個人の活用を通して体験交流の場となり、人と地域の再生につながる、ということ。

工夫した点

グループ分けの方法を参加者の関係性を深めるよう工夫したこと。また参加動機のアンケートを一人ひとりに記入していただいたこと。空き家の数は全国で756万件、東京都だけでは54万件。杉並区で3万2千件もあります。そうした状況を踏まえて、グループに分かれてアイデアを出しあっていました。

参加者の感想

空き家を持っていて使い方に困っている方、探している方両方多くいらっしゃるということを知った、人とスペースによって、交流が深まり、地域に社会に貢献できるのでは、国際交流もそうですが、地方から出てきた人の交流の場ができれば良い、などがありました。

実施してみて気づいたこと

空き家・空室に対して関心のある人が多く、同じことを考えている人たちが集まって話し合える場があることがよいと感じた。また、そうした空間を持つオーナーと、実際に使用したい人の双方に相談できる機関が必要だということも感じました。

世代間交流 かるた作りと読み聞かせ 世代間交流グループ 代表 中山 久子

実施した目的

今、ひきこもりをはじめ核家族化もあり、他世代との交流が少なくなっています。家の中に閉じこもっていないで交流できるような場をつくりたいと思って実施しました。

実施するまでの経過と内容

私たちのチームは10人のメンバーがおり、夜コースの中では一番の人数がいました。そのため議論も喧々諤々、何をするかを決めるのに、とても大変でした。実際に行なった内容は、1

つは、杉並にちなんだ昔話の読み聞かせ。杉並区内で活動されている先生にお願いしました。参加されたみなさまに、気持ちよく聞いていただけたと思います。もう1つはかるた作り。杉並にちなんだ、オリジナルのかるたを作り、世代を超えて遊ぶことでした。これについては、どうなるかと思いましたが、参加された方それぞれがその場で考えながら25~30組のかるたができ、それを使ってみんなで遊び、みなさまに喜んでいただけたと思います。



実施してみた感想

何が一番良かったかというところ、このチーム自体が20代から60代までの、「世代間交流の場」であったということ。一緒に活動をする中で、世代を超えて密な関係をとれて仲良くなったことです。これからも仲間意識をもって活動をしていけたらと思っています。

B：「 年後の自分 目標宣言！」

3年後の自分 目標宣言！

地域の人々が運営する『すぎなみ野菜作り支援センター』を設立する！ 発表者 大岩 高
卒業後のこれからやっていきたいことは、これまで自然環境の中で生きてきましたので、杉並の野菜作り支援センターの設立を提案したいと思っています。ワークショップを実施する中で、「自給自足」、「地産地消」、「食の安全」など、食と農に興味を持つ参加者が多く、既に、色々な経験を積まれていることを感じました。また今後も、このような方たちと継続して交流できるような場所があればよいと思いました。

大人塾の中で学びきれていないものとして、私はこれまで知識偏重型の教育・画一的な教育を受けてきたので、自分で課題を発見し、解決していくことが、まだまだ身につけていないと感じています。自然環境や緑の大切さについて学んでいくのに、野菜を切り口にするには収穫の達成感もあり、楽しみながら、身につけていくことができるのではないかと考えています。最後に、今後の自分の展望として、まずは今年から区民農園で正しい野菜の作り方を習いたいと思っています。

8年後の自分 目標宣言！

田舎にもどって二度生まれの私を生きる（そして仲間を見つける） 発表者 尾平 継美

夜コースに参加して、前半は講義、後半は実践。践する段階になって、もうやめてしまおうと思ったときが何度もありました。でも、今やめたら絶対後悔するという思いもあって、なんとかワークショップのメンバーになりました。話し合いの中で、なかなか意見がまとまらず自分の意見も言えず...そんな状態で当日を迎えましたが、ワークショップが終わった後に、自分が参加して、仲間と一緒にやって、苦しんで、それがなんとも達成感というか、嬉しい気持ちになりました。また、夜コースのML（メーリングリスト）にも参加して、みなさんからのメールを拝見していると、本当に驚くほど前向きに生きている言葉に触れて、本当に驚きました。

卒業後のこれからの目標ですが、定年退職後、郷里に帰ることを決めました。なぜこれまで決められなかったかということ、日々仕事に追われ、その日暮らしに生きていたように思います。地域でどう生きてよいかわからなかったのかもしれませんが。ワークショップを通して、仲間と一緒に作り、苦しみ抜いたりする中で、地域に生きるということがどういうことが気づかれました。これからは、空いた時間は田舎に帰ってまずは仲間をつくりたいと思っています。具体的に田舎で何をするのは未だ大きな課題ですが、まずは仲間をつくってみることが大切だということ、その大切さに気づかされました。

8年後の自分 目標宣言！

「共同XXX」、「シェアXXX」NPO立ち上げに向け活動開始。仲間づくり！

発表者：小林 一朗

食と能のワークショップを実施して、参加された方からおいしいね、と言われたときに本当に嬉しいなということを実感しました。場づくりをして、その場を共有すること自体が楽しいことであり、また大切であることを考えさせられました。私はこれから、シェア(共有すること、分けること)ということを共通のテーマとして考えていきたいと思っています。もっといろんなものを所有する、もしくはもっと消費をする、それだけでは満足できない世の中になっていると思うからです。

具体的なシェアの方法として、「ランドシェア」というのを考えました。土地を共有して利用しようではないかということ。ワークショップの中で感じたことに、農地を耕してみたい方はいっぱいいるということがありました。一方で農作放棄地もたくさんあり、マッチングしていない状況です。それをITでつなぎあわせることはできないかと考えました。今後もシェア=共有ということ 키워ドにして考えてみたいと思っています。

HPをつくって発表しようかと思っけていましたが、そういう場もシェアの発想でツールとして使えないかなと思っけています。今後動きがあればML等でご紹介させていただきたいと思っけています。

最後に、この1年間でとても印象的に残っていることは、ワークショップを実施する際に、どんなことをしようか迷っけていた方がたくさんいました。実施後には「もっとやればいいじゃん！」という感想を持つことができたこと。ここがきっかけで次の一歩になりました。これから、新しい活動をはじめていくことになったらと思っけています。

第2部 ワールドカフェで大交流会

進行：夜コース学習支援者 広石 拓司

ワールドカフェの進行をさせていただく広石です。引き続きよろしくお願いいたします。はじめにワールドカフェがなぜできたのかということについてお話しします。この仕組みを考えた人は、いろんな仕事をされている方にどんなときに一番話が盛り上がるか、もしくはアイデアが出てくるときはいつか調査されたそうです。そうしたら、工作中的の会議の場ではなく、仕事をちょっとブレイクして、コーヒーを片手に雑談しているときだという意見が多かったそうです。つまり、カフェで話しているような空間のほうが話が盛り上がり、アイデアが出やすいということですね。しかし、一人や二人でカフェでお茶をしながらのおしゃべりはみなさん手慣れていると思います。しかし職場や地域活動のような場、つまり50人や100人といるところで、どうしたらカフェで話しているような雰囲気が出せるかということを探していった結果、開発されたのがこのワールドカフェという方法です。

今回は簡単にルールをご説明した後に、ぜひみなさんで体験してみたいと思います。昼コース、夜コースそれぞれの方は、同じコースの方たち同士では顔なじみですが、この場には両コースの方、さらには卒業されたOB・OGの方もいらっしゃっていて、はじめての出会いがある。これから話し合いの時間を設けていきますが、話し合うにあたって、正しい答えをみなで考えていくことも大切ですが、ここでは、いろんな人がいること、またいろんな考えがあるということにぜひ触れていただきたいと思っています。そんな人・考え・価値観の発見の時間にしたいだけだと思います。

さて、実際にワールドカフェを行うにあたって、今回は「杉並の地域活動の参画者をもっともっと増やすには？」という大きなテーマを設定しました。今年、大人塾に参加された方の初回のアンケートを見てみると、これまで地域に興味がなかった、関わってこなかったという方が多かったのですが、この1年間を通して、地域活動を少しでもやってみたら、楽しい！、続けてみよう！と思った方はたくさんいらっしゃるのではないのでしょうか？このように、みなさんのように地域に関わってみたいとおぼろげながらも思っている方を、今後もっと広く、どういう風にしたらまきこんでいけるのか、この場にいる全員で考えていけたらと思います。それでは、はじめましょう！

ワールド・カフェ テーマ

全体テーマ

「杉並の地域活動への参画者を、
もっともっと増やすには？」

- A 新しい活動が生まれやすくするためには？
- B 既存の活動に参加しやすくするには？
- C 私たち大人塾の卒業生がやるべきことは？
- D 大人塾は、今後、どのように展開すべき？



